

VI 審査を終えて -審査講評

1964年の東京五輪という、日本国家の節目のときにつくられた国立競技場。戦後日本の、いわば復刻の証であったその建物を建て替え、新たなスポーツの聖地をつくるべく、国際デザイン・コンクールが開催された。

新国立競技場の施設に要求される機能条件は、旧競技場に比して膨大かつ複雑である。課題は大きく次の三つに集約される。

第一は規模条件。現代の大規模なスポーツ国際大会の開催には80,000人を収容できる会場が必要だ。その巨大スケールのボリュームを、絵画館や神宮球場、東京体育館などが隣接する狭い敷地の中に無理なく収めなければならない。

第二は重層的なプログラム。陸上競技、ラグビー、サッカーといった異なるスポーツに対応した臨場感ある観客席の在り方が求められる一方、コンサートなどの文化的な活用を可能とするために可動式の屋根や、芝生のメンテナンスのための技術が必須である。

第三は建設スケジュール。新競技場は、すでに2019年に開催が決定しているラグビー・ワールドカップ、2020年の招致を目指すオリンピック・パラリンピックのメインスタジアムとなることが決まっている。このタイトなスケジュールの中で設計から建設までを完遂しうる建築でなければならない。

そして、これらの課題に応えた上で、現代のような停滞気味の社会状況の中で、国家プロジェクトとしてつくられる新競技場には、単純な施設拡充以上の、社会に対するメッセージ、新しい時代のシンボルとなるべき創造力が期待される。国際デザイン競技募集要項では、これを「地球人にとっての希望の象徴となるべきデザイン」と表現した。

短い公募期間にもかかわらず、世界各国から意欲的かつ個性的な46作品が集まった。

1次審査では、作品の匿名性を確保した上で日本人審査員8人から推薦があった作品について、デザイン性、機能性、実現性といった様々な観点から検討を行い、まず11作品に絞り込んだ。

2次審査では、グローバルな知見を求めて、ノーマン・フォスター、リチャード・ロジャースという世界的建築家2名を審査員に加えた10人の審査員で投票を行い、その上位作品について、未来に示すデザイン性、技術的なチャレンジ、スポーツイベントの際の臨場感、施設建築の実現性等の観点から詳細に渡り議論を行った。

その結果、最優秀案にZaha Hadid Architects、優秀案にCox Architecture、入選案にSANAA (Sejima and Nishizawa and Associates) + Nikken Sekkeiを選定した。

Zaha Hadid Architectsの提案は、スポーツの躍動感を思わせるような、流線型の斬新なデザインである。極めてシンボリックな形態だが、背後には構造と内部の空間表現の見事な一致があり、都市空間とのつながりにおいても、シンプルで力強いアイデアが示されている。

可動屋根も実現可能なアイデアで、文化的利用時には祝祭性に富んだ空間演出が可能だ。とりわけ大胆な建築構造がそのまま表れたダイナミックなアリーナ空間の高揚感、臨場感、一体感は際立ったものがあつた。この強靱な論理に裏付けされた圧倒的な造形性が

最大のアピールポイントだった。

また、橋梁ともいべき象徴的なアーチ状主架構の実現は、現代日本の建設技術の粋を尽くすべき挑戦となるものである。

自然採光・自然換気・太陽光発電・地中熱利用・中水利用・雨水利用のクーリングシステム等の提案においても、日本の優れた環境技術が十分に活かされるだろう。

アプローチを含めた周辺環境との関係については、現況に即したかたちでの修正が今後必要であるが、強いインパクトをもって世界に日本の先進性を発信し、優れた建築・環境技術をアピールできるデザインであることを高く評価し、最優秀案とした。

Cox Architecture の作品は、透明で繊細な3次曲面のドームと、内部に浮かび上がる木壁のスタンドが特徴的で、その品格を備えた静謐なデザインが好評を得た。

セクター計画されたスタンドは機能性・実現性が高く、臨場感にあふれたものとなっており、屋上庭園を含めた魅力的なホスピタリティについても高く評価された。

透明度の高い普遍的形状のドームは、洗練された印象を与える一方で、スポーツの聖地である国立競技場としての祝祭的な高揚感、強いメッセージ性に欠けるのではないかという印象が残り、優秀案となった。

SANAA (Sejima and Nishizawa and Associates) + Nikken Sekkei の作品は、環境に呼応したなだらかな起伏のある屋根と観客席が、これまでにない開かれた競技場のイメージを提示していることが高い評価を得た。

また周辺環境や自然との親和性に富んでおり、環境の時代の新しい建築のあり方を示していると考えられた。

斬新な空間イメージが高い評価を得た一方で、曲面をなす屋根のメンテナンスを考慮した仕上材やその支持方法、可動屋根や可動遮音壁の実現性、起伏ある屋根とスタンドの隙間が観客の集中力を妨げることなど、美しいパースのイメージを保ちながら現実的課題をクリアすることに懸念があり、入選案となった。

上位三提案の評価については、審査員の間でも大いに意見が分かれ、最後まで激しい議論が交わされた。結果として、実現性を含めた総合力にまさる Zaha Hadid Architects 案が選ばれたが、国家プロジェクトのデザインの方向性を決めるに相応しい、実りある国際デザイン競技であった。

今後は、最優秀案に選ばれた Zaha Hadid Architects の優れたデザインを実現するため、改めて基本設計、実施設計の設計者をプロポーザルで選定して設計にあたるチームがつくられる。

各方面と十分な議論を重ねて意見を取り入れながら、日本として世界に誇れる最高の競技場が想像されると同時に、この競技場に込められるであろうエネルギーが新しい時代の表現、未来に向けたメッセージとなることを大いに期待する。